
魔法少女リリカルなのは 『蒼』の力を使い『紅蓮の王』になる者

sutoraikubureido

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 『蒼』の力を使い『紅蓮の王』になる者

【Nコード】

N3172X

【作者名】

s u t o r a i k u b u r e i d o

【あらすじ】

俺は、力が欲しい……
あいつを守るだけの力を……
そう思ってた俺は、手に入れた。
『アルカナ』の力を……
だから俺は、この力になって見せる……
『紅蓮の王』に……

プロローグ（前書き）

この小説は、あくまでパラレルワールドの話なので原作キャラの性格などが違ったりする可能性が有ります。

それを許容で出来ない方は、読まないで下さい。

また、許容ができてお読みになる方は自己責任でお願いします。

それで、許容できてないのにお読みになったりして感想欄などに文句を言ってこられても、一切関知しませんので。悪しからず。

それでは今回はかなり短いですが、どうぞ。

ブローグ

俺は、力が欲しい……。

あいつを守り切れる力が……。

俺は、あの世界では無力だった。

ただあいつや仲間が傷つくのを、黙って見てるしか無かった……
だから力が欲しかった…… あいつを守り切り、仲間を助ける事の出
来る力……それが欲しかった……。

だが、俺は手に入れた……その力を……

『アルカナの力』を……

俺は決めた……。どんな事になってもこの力を全て手に入れ、王
になると……

ロード・オブ・ヴァーミリオン
紅蓮の王になると決めたのだから……

プロローグ（後書き）

ためしに出してみました、いかがでしたか？

ちなみに作者は、LOVは友人の誘いでRe：2から始めたので、まだプレイ経験は少ないです。

ブレイブルも最近やり始めたので設定が分からなかったり、キヤラの特徴や性格が解らない事があります。

色々なサイトを見てそれを参照して書いていこうとしています、もし皆さんが知っているのと違ったりしたら、教えていただけると嬉しいです。

この小説は不定期になるかも知りませんが、どうかよろしく願います。

プロローグ2（前書き）

プロローグ2を出し忘れていたので、割り込みで出しておきます。

作者は、小説を書く時に主人公視点の時は一人称視点を使い、主人公以外の他の人物の視点の時や戦闘の時には三人称を使わせていただきます。

目安として、
- 視点チェンジー と書かせていただきます。

プロローグ 2

「新しいロストロギア？」

ここ……ミッドチルダの都市、クラナガンにある機動六課の部隊長室で3人の人物が何かを話し合っていた。

「そうなんよ。さっき、リンディさんから連絡があつたんやけどな」
先に話を始めた関西弁の人物、八神はやてが他の2人にこれからの任務の事を話している。

「母さんから？」

話を聞いていた1人、フェイト・T・ハラオウンがはやてに質問する。

「せや。リンディさんの話によるとやな、ジュエルシードよりも危険な物らしいんやけど……」

はやては言葉を詰まらせる。

（これを言っていいいんやろうか？）

「どうしたの？ はやてちゃん？」

突然、言葉を詰まらせたはやてにフェイトと一緒に話を聞いていた、高町なのはがどうしたのか聞く。

「実はやな、そのロストロギアは全部で10個あつてその殆どが無人世界にあるみたいなんやけど、そのうちの何個かは地球にあるみたいなんよ。」

「えっ！？ 地球に！？」

なのはとフェイトは驚いた。自分たちの故郷にジュエルシードよりも危険な物が新しく現れるなんて、予想外だったからだ。

「そうや。でも、まだ憶測の範囲内なんやけどな」

はやては、一呼吸置いてから続きを話す。

「それで、突然なんやけど。明日に私たち機動六課は、地球に向かいます。なのはちゃん、フェイトちゃん、みんなにこの事を伝えておいてな」

「地球かー。前に任務で帰った以来か……あーあ、たまには休暇で帰りたいな。前に帰った時も任務だったし」

なのはがそんな事をぼやく。

「やっぱり、任務じゃなくて休暇で帰りたいもんね」

フェイトもそれに共感する。

「まあ、なんや。2人共、例の事は皆に伝えておいてな」

「うん。わかった」

「うん。じゃあね、はやてちゃん。またあとで」

そう言つと、なのはとフェイトは部隊長室から出て行つた。

（たしかに、任務じゃなくて休暇で帰りたいなー）

はやてもそんな事を思っていた……が。

（でも、何やる……この胸騒ぎは……）

はやては胸騒ぎを覚えていた。

（何も無いと良いんやけど……って、残ってる仕事を片づけて、明日の準備せんと）

はやては胸騒ぎを覚えた事を一旦、頭の隅に置き残っていた仕事をやり始めた。

すでに、物語が始まっている事に気付かずに……

プロローグ2（後書き）

はやての口調、合ってるか不安だ……

余談ですが、作者はLOAをクリア後のヘカトンケイルを倒した辺りで積んで止めました。

設定（前書き）

設定です。

設定

神宮 煉（しんぐうれん）

この小説の主人公。3年前に突然、ブレイブルーの世界に飛ばされてそこでノエル達と知り合った。

なお、何故リリカルなのは世界の住人である煉が、ブレイブルーの世界に飛ばされたのかは不明。

だが、飛ばされたブレイブルーの世界で「紅蓮の王」を継ぐ者として覚醒した。

そして、現在は全部で10個の「アルカナ」を集めている。リリカルなのはの世界には、本編の半年前に帰ってきた。

ノエル達とは違い、私立聖祥大学付属高等学校の高校生なので働いてはいないが近所の本屋でバイトしている。

なのは達の後輩でもある。

ちなみに、アルカナを探知できるのは煉とノエルだけ。

3年とゆうのは、ブレイブルーの世界での経過時間であり、リリカルなのはの世界での経過時間は1年と6か月。

ノエルⅡヴァーミリオン

この小説のヒロインで、ブレイブルーのメインヒロインでもある。
原作とは違う「確率事象」ランダムフェノメノンの世界の住民。

ブレイブルーの世界に飛ばされてきて、気絶してた煉を介抱した事がきっかけで知り合った。

この小説のノエルは、原作であつた戦闘以外は壊滅的にダメとゆう事は無く、料理も人並みできる。

だが、寂しがり屋で人見知りするとゆう事は変わらない。虫も苦手のまま。

戦闘の時に使うのは、原作と同じく「魔銃・ベルヴェルク」。

よく煉と一緒にいる。原作より胸が大きい。だが、ライチやタオカ力などには及ばない。

リリカルなのはの世界に来た時に、お世話になつた高町士郎に頼んで「翠屋」で働かせてもらっている。

ちなみに、この小説での年齢は原作より上。

ラグナ「ザ」ブラッドエッジ

ブレイブルーの主人公で、ノエルと同じく原作とは違う「ランダムフェノ確率事象」から来た。

ブレイブルーの世界で、煉と共闘した事がある。

この小説のラグナの性格は、原作と変わらない。ノエルに理不尽に辛く当たったりはしていない。自分のもう1人の妹と感じで接している。

戦闘の時に使う武器は、原作と同じセラミック製の「大剣」。

煉達が暮らしている家では、一番年上である。ちなみに、ラグナはリリなの世界では「風芽丘図書館」で働かせて貰っている。

ノエルと同じく、この小説での年齢は原作より上。

ジン「キサラギ

ラグナの弟で、ノエルやラグナと同じく原作とは違う、「ランダムフェノ確率事象」^{メロン}から来た。

ブレイブルーの世界で、煉と戦った事がある。

この小説でのジンは、ラグナと同じくノエルに理不尽に辛く当たってはいないし、もう1人の妹と接している。

戦闘の時に使うのは、原作と同じく「ユキアサネ」。

ラグナと同じで、働いている。ちなみに勤務先は、「風芽丘図書館」。

本当はラグナが図書館で働く予定だったが、自分から「ここで働く」と言ったためラグナは「翠屋」の方に代わった。

ノエルやラグナと同じく、この小説での年齢は原作より上。

梢（こずえ）

煉の使い魔の内の一体。煉と契約を結んだ。

普通の使い魔は、別空間にいるのだが梢だけはこちらの世界にいる。

いつもは、家の掃除や洗濯などをしている。

真名^{まな}はサキユバス。梢は、人間でいる時の偽名。

戦闘時は、結構強い。

高町なのは

私立聖祥大学付属高等学校に通ったとゆう事以外、変更点は無し。

フェイト・T・ハラオウン

なのはと同じく、私立聖祥大学付属高等学校に通ったとゆう事以外は変更点は無し。

八神はやて

なのはやフェイトと同じく、私立聖祥大学付属高等学校に通ったとゆう事以外は変更点は無し。

シグナム

煉と知り合いで、剣を教えた事がある事以外は、変更点無し。

ヴィータ

煉と知り合いである事以外は、変更点無し。

シャマル

煉の知り合いで、煉にポイズンクッキングを食べさせた事以外は
変更点無し。

ザフィーラ

煉と知り合いである事以外は、変更点は無し。

ティアナ

昔に煉と会った事がある事意外は変更点無し。

スバル

昔、ミッドチルダに煉が行った時に会った事がある以外に変更点

無し。

キャラ

煉と3年前に会った事がある以外に変更点無し

エリオ

キャラと一緒に、3年前に煉と会った事以外に変更点無し。

高町ヴィヴィオ

煉を、お兄ちゃんと呼んでいる以外に変更点は無し。

特殊能力

アルカナを1つ手に入れることに習得する能力。

1つ目は、精神リンク。
2つ目は、ゲート。
その他は不明。

精神リンク

煉の特殊能力で、文字通りの能力で精神をリンクさせたいと思った相手と自分と相手の精神をリンクさせる事が出来る。この能力で精神をリンクを行ったのは今の所、ノエル、ラグナ、ジンの3人だけである。

また、1回でも精神をリンクさせるとリンクされた側の能力が使える。さらに、テレパシーも可能になる。

精神リンクを行った回数ラグナ>ノエル>ジン>の順で、ラグナが一番多い。

ゲート

錬の2つ目の特殊能力。

自分の武器や使い魔をいきなりその場に呼び出す事が出来る。だが、自分はその能力で別の場所に移動する事も出来ない。

アルカナの出現条件

アルカナには出現条件があり、その条件は地球に現れる魔物やミッドチルダに現れる魔物のを一定数を倒すと現れるとゆうもの。

だが稀に、条件を満たしていないのに急に出現したりする事もある。2個目のアルカナはこの急に出現するパターンで現れた。

設定（後書き）

新しい設定ができれば、追加していこうかと思っています。

1 0 / 1 1 ゲートを追加しました。

1 0 / 1 5 アルカナの出現条件を追加しました。

1 0 / 3 1 高町ヴィヴィオを追加しました。

嘆きの竜皇、グレンデル（前書き）

戦闘シーンがうまく書けない……

嘆きの竜皇、グレンデル、

???????主よ!??????

???????我らが主よ!^{ロード}??????

???????アルカナを集める! さすれば、お主が望む力が手
に入る!??????

???????主よ! アルカナを集めるのだ!??????

???????主よ……??????

「ここか？」

俺は眼前に見える遺跡を見ながら、隣に居る少女に尋ねる。

「ええ、間違いないわ。ここにアルカナがある！」

やはり、そうか。ここにアルカナが……。ん？この気配は？

「つと、どうやらおいでのようだぜ」

俺は後ろを振り返る。するとそこには、魔物…ゴブリンやスケルトンなどがいた。

（10体ぐらいか……）

しかもこいつら、アルカナの影響を受けている。こいつら、普段は大した事は無いがアルカナの影響を受けているとなると……厄介だな。

「やるしかないみたいね」

「だな」

俺の隣にいた少女がそう言いながら、自分の両手に持っている魔銃を構える。それに合わせて俺も片手剣を構える。

「……みたいだな」

俺も地面に刺さってる自分の片手剣を抜き、構える。そして……

「行くぞ！！」

そう言っただけ俺達は敵に向かって駆け出す。敵との擦れ違いざまに敵を回転を付けながら斬る。

「グアアアアア！！」

「よし！」

（まずは一体！）

俺は、思いながら近くいた敵を斬り付ける。

「グオオオ！」

「ちっ！ もう一度！」

斬り込みが足りなかったか！俺はもう一度、斬り付ける。

「グガアアアア！」

「ふん」

俺は動くのを一旦止めて、周りを見渡す。

「クソッ」

あいつも頑張って戦っているが、如何せん敵が多い。

ちっ、面倒くさい！魔法を使うか！俺は右手に魔力を込めていく。

そして?????

「燃え上がれ！！」

「グガアアアア！！」

俺の右手から火の塊が放たれて敵を焼き尽くす。

（よし、もう一発だ！！）

俺はさっきより多い魔力を右手に込める。

「ノエル！！ 巻き込まれなくなったら下がれ！！」

俺は、少女…… ノエルに大声で下がるように促す。

「っ！？ うん！！」

ノエルは、俺の声を聞いて戦っていた場所から離れて魔法に巻き込まれない場所に逃げる。よし！これで！

「消えろ！！」

爆音を出しながら炎は敵を巻き込んだ。

「グギアアアア！！」

「はぁ。ノエル！大丈夫か！」

「うん。何とか。でも、いつ見てもすごい威力ね」

ノエルはさっきまで敵がウジャウジャいた場所を見ながら聞いてきた。

「俺が次の紅蓮の王だからだろうな。こんな力が使えるのは」

「紅蓮の王か…… 最初に聞いたときは信じられなかったけど、やっぱり凄過ぎるわ」

「そんな実感ないんだけどな」

俺はそんな事を言いながら、アルカナのある遺跡の方を見る。

「少し休んだらあの遺跡に行くぞ」

「ええ、わかったわ」

「結構、入り組んでるみたいだな」

「そうね」

俺らは少し休憩したのちに、アルカナがあると思われる遺跡の中に入っていた。そうして、しばらく遺跡内を歩いていると……

「……この扉の奥から力を感じる……」

最深部に来たあたりで、ノエルは目の前の扉に手を触れながら言った。

「ここか」

俺は扉の前に立ち、片手剣を持ち直す。

「ここからは1人か」

「ねえ？ 煉」

俺は呼ばれたので振り返った。

「ん？ 何？」

「……煉^{れん}。生きてかえってきてね……」

ノエルが心配そうな声を上げる。

「ああ。それじゃ、行ってくる」

俺は後ろに振り返り扉に手を掛けた。

そして、扉は開いた。

「くっ、眩しい!？」

だが、扉が開いた時の光に飲み込まれて????

俺は、消えた。

ここは、扉の中か……

（クソッ、何だコレ？ 土煙か？）

「視界が悪すぎる」

そんな事を口にしていたら、何時の間にか土煙が晴れてきていた。
「ふう、やっとまともに見えるな」

（さあて、一体どんな場所だ？）

だが俺は、次の瞬間言葉を失った。

「！？」

何だここは！？ 俺らがさっきいた場所とまるっきり違う所じゃないか！ 俺は、しばらくその光景を見ていた。その時、頭にある言葉が浮かんだ。

『ウルトバーンの丘』

「ここがウルトバーンの丘……」

（まさか、この場所って事は……まさか！？ 此処の守護者は！？）
マスターガーディアン

と、そこまで考えが至ったその時、奴が来た……

「ほう？ 何十年ぶりだ？ ここを訪れる者がいるとは……」

来た！ 奴が！

俺は、知……っている。こここの守護者を……疾風戦慄の竜騎と恐れられる嘆きの竜皇……グレンデル！！

「貴様か……新たな紅蓮の王になりし者は……」

「……そうだ！」

「なるほど、お主が……」

こいつ、ただ話してるだけなのに威圧感が凄い！ やはり、一筋縄じゃ行きそうにないか。

「ほう？　すでにアルカナを1つ持っているか。少しは楽しめるか」

「悪いけど、負ける気は無いぞ！！」

「望む所。私もそうやすやすと倒されはせん！！」

2人の視線がぶつかる。視線をぶつけ合いあがらお互いに武器に手を掛ける。……そして?????

「行くぞ！！」

戦いの火蓋が切って落とされた……

ー視点チェンジー

「てりや！」

先手必勝と言わんばかりに、煉はグレンデルに先制攻撃する。

「ふん！」

が、グレンデルの剣によって弾かれる。

「てりや！！」

だが、怯まずに煉は連続斬りで攻撃する。が……
「ふん！」

また弾かれる。

「くっ、もう一回!」

だが、煉は怯まずもう一度、連続斬りで攻撃する。

「グッ!」

グレンデルは、さすがにダメージが通ったのか、わずかだが怯んだ。

「ふふ、やる」

だが、グレンデルは余裕の表情だ。グレンデルは、飛び上がり空を飛ぶ。

「これを避けられるか?」

空を飛んでいるグレンデルは、空中から自分の剣を投げつけてきた。

「なんの!」

煉はそのまま片手剣を両手で振りかぶり、その剣を?????

「てい!」

弾き返した。

「ぐっ!」

弾き返した剣は、グレンデルの翼に直撃した。

「中々だな」

攻撃を喰らったはずなのに、先程と同じく余裕の表情だ。

「ちっ、次はこれだ!」

煉は、グレンデルをまるで踊っているような動きで斬り付ける。

「この!」

グレンデルは剣を左手に持ち替えて、右手で殴りつけようとする。
が?????

「何!?!」

煉は、消えた。

「一体、どこだ?」

グレンデルは、いきなりの事に少し驚きながらも、煉を見つけようとする。

が、煉はタイミングを見計らい????

「ぐ！ 何!?」

グレンデルの背中を斬り付けた。

ブシャアアア??????

そんな音をだしながら、グレンデルの背中から血が噴き出る。

「よし！」

「私とした事が……」

グレンデルは、自分の背中を斬り付けた人物を侮っていた。

何十年も戦って無かった所為で、感が鈍ってしまったのだ。

（感が鈍りすぎたか。これは……少し本気を出すか……）

グレンデルは、内心そう思った。

（クソッ。全然ダメージが通ってる様子がねえ！）

煉はそう思いながら、グレンデルから距離を取る。

（魔法は……炎でいくか！）

そして、自分の右手に魔力を循環させ魔法を使う準備をする。

「む？魔法か……ならばこれだ！」

グレンデルは、こちらが何をしようとしてるのが分かったのか、

グレンデルも何かを唱え始めた。

そして、右手に集まった魔力が限界まで来ていた。煉は、右手に

溜まった魔力を解き放った。

魔力を解き放った右腕の手の平には、サッカーボールサイズの炎

の塊があった。

「炎の魔法か面白い……」

煉はその場で飛び上がり、炎の塊をグレンデルに投げつける。

「燃え上がれ!!!」

炎の塊は、轟音を出しながらグレンデルを包み込んだ。が?????

「ちっ！」

グレンデルは、立っていた。しかも、無傷で……

「魔法無効化か……」

そう、グレンデルが何か唱えてると思った時に唱えていたのは、

魔法を無効化するバリアの呪文を唱えていたのだ。

「なに、落ち込む事は無い。私もこれが無かったら少々危なかったからな……」

グレンデルは一呼吸置いて、煉を両目で見据えて????

「さて、少し本気を出すか……」

そう言い放った。

「な、に？」

グレンデルは空中で自分の目の前に剣をもっていき刃を逆さまにして、何かを唱え始めた。

「不味い……」

今、グレンデルがしようとしている事は「危険」と「止める」と煉の脳や体が警告を鳴らす。

「うおりやああ?????!」

煉はジャンプして、グレンデルに飛び掛かる。だが????

「ふん！」

「グッ！」

グレンデルの左の拳に殴られて止められる。だが、ギリギリで煉は盾を構えたのでダメージは減少した。

けれど、そのまま地面に落ちていき……

「がはっ!？」

そして、地面に叩き付けられた。

（くっそ、痛い……）

煉がそんな事を考えていると、グレンデルはすでに呪文を唱え終え、剣が消えた。

（不味い!! 何か来るぞ! 逃げないと!）

煉は、体を無理矢理に動かして周りに散らばっている石柱の後ろに隠れる。

「喰らえ……ホーリーレイ……」

グレンデルがそう叫ぶと、空から光の柱が降ってきた。
ズガガガアアアア?????!!!

（クソッ！？ 何だこの威力！？ 洒落にならねえ！！）

煉は、何気なくふっと上を見た。そこには……

「なっ！？」

煉の真上にホーリーレイが迫っていた。

（クソッタレ！！）

煉は心の中で、悪態をつきながら別な石柱の影に素早く移動する。すると、煉が別の石柱の影に隠れた瞬間？？？

ズガ？？ン！

さっきまで、煉がいた場所にホーリーレイが直撃した。

（間一髪か……）

煉がそんな事を考えいたら、ホーリーレイが降るのが止まっていた。

そして、突然グレンデルは煉に質問を投げかける。

「貴様に聞きたい事がある」

（聞きたい事？）

グレンデルは煉に聞きたい事、それは……

「貴様は何でアルカナを集めようとする」

アルカナを集める理由。煉が何でアルカナを集めるのか？ その理由が知りたかったからだ。

「……」

だが、煉は口を閉ざしたまま一言も喋らない。

「答えぬか。それでもよかるう。だが？？？？」

（だが？）

「お前は、どのみち負けるのだから」

そうグレンデルが言った瞬間、グレンデルが煉の目の前に現れ？
？？？

（しまった！？ ここにいた事がバレた！？）

避ける隙を与えず、煉の左腕に剣を縦に突き刺した。

ブシュユユユ？？？

煉の左腕から血が噴き出る。盾も剣に刺された所為で、粉々にな

った。

「ぐ、があ、はあ」

（くそっ……痛すぎて声が出ない……）

煉は、激痛に意識を飛ばしそうになるが何とか踏みとどまる。

「もう一度聞く。何故、貴様はアルカナを集めようとする？」

グレンデルは、もう一度聞いた。煉が何故、アルカナを集めるのかを。

「それは……」

煉は激痛の中、何とか声を搾り出す。

「それは？」

煉は、正直に話す。自分がアルカナを集める理由を……

それはグレンデルの予想を外れていた。

「守りたい奴が……いるから」

「何？」

グレンデルは訝しげな声を出す。

（コイツは何を言っている？）

グレンデルはそんな事を思った。何を言っているのか一瞬、解らなかつたからだ。

「俺は、あいつを……守りたいだけ。そして……あいつを守り通せる力が……ほしだけ」

「お前は、たった1人のためにアルカナを集めるとゆうのか？」

やっと理解が追いついたグレンデルが、そう問いただす。

「ああ、そうだ」

グレンデルは混乱した。何故、たった1人のためにそんな事が出来るのか……。それがわからないから。

（そう、ほしい。あいつを……ノエルを守る力が……俺のエゴかもしれないが、あいつを守る力がほしい……だから……！）

煉も覚悟を決め、ここまで来ていた。ノエルを守りたい……その気持ちで……

（だから、俺は……）

煉は、右手をグレンデルの目の前に突き出す。

「……なつてやる！ ロード・オブ・ウァーミリオン 紅蓮の王に！！」

煉が大声でそう叫んだ瞬間、右手からとんでもない魔力が放出され？？？？

「っ！？」

「闇に……」

煉の右腕が、異形の形になり？？？？

「喰われる！！！」

グレンデルを、喰った。

「な、に？」

グレンデルはその攻撃を喰らい、後ろに後退する。と、同時に左腕に刺さっていた剣が抜ける。

「ぐっ！」

煉は、剣が抜ける痛みに耐える。

剣が抜けた左腕は、痛々しい傷が残っている。

グレンデルは体制を立て直し、煉を両目で見据える。そして、攻撃の準備をしようとする。

（っ？ 何だ？）

が、グレンデルは自分の体がおかしい事に気付く。魔力がさっきより減っているのだ。

（馬鹿な！？ 私は、そんなに魔力は使って……はっ！ まさか！？）

グレンデルは自分の魔力が使ってもいないのに減っている理由に思い当たる。

「くっ、貴様……一体、何をした！？」

煉は、自分の左腕の傷に回復魔法を掛けながら、グレンデルに自分が何をしたのか教える。

「お前の魔力と生命力を喰ったのさ……」

煉は左腕の傷が塞がったのを確認しながらそう言った。

「喰った、だと？」

（そんな技を持つているとは……）

グレンデルは、忌々しいと思った。そんなモノをホイホイ使われ
てはこっちの身が持たないからだ。

煉はグレンデルの様子を見ながら、仲間にテレパシーする。

「ラグナ。聞こえるか、ラグナ！」

煉は仲間の1人……ラグナとテレパシーしようとする。

「ん？ 煉か？ どうした？」

「そっちから来ないのなら、こっちから行くぞ！！」

煉がテレパシーをしていると、グレンデルが攻撃してきた。

「ちっ！」

「ラグナ！ いきなりだけど、お前の『蒼』フレイフルの魔道書の力を貸してくれ！」

煉はグレンデルの攻撃をかわしながら、ラグナに力を貸してくれるように頼む。

「っ！？ おい、お前！ まだ『蒼』の魔道書を使いこなせて無い
だろが！」

ラグナの言う通りだ。煉はまだ、『蒼』魔道書の力を使いこなせて
はいない。だが……

「そんな事は分かってる！ だけどそこを何とか頼む！」

煉はその事を承知でラグナに頼み込む。

「……分かった。ただし、3分間だけだ！ それ以上は無理だ！」
制限時間付きだが、ラグナはそれを了承した。

「ありがとう。ラグナ」

煉は、そうラグナにお礼を言った。

そして、何かを呟く。

「リンク開始……………リンク完了」

そう呟き終わると、右手を目の前に突き出す。

「む？」

グレンデルは咄嗟に身構えた。

煉は、そう言うと言動コードを唱える。

「第666拘束機関解放！ 次元干涉虚数方阵展開！」

煉の周りに、とんでもない魔力が集まり始める。

「な、何だこの魔力は！？」

グレンデルは戸惑っている。尋常では無い魔力が集まっているからだ。

だが、煉はまだ発動呪文を紡ぐ。

「イデア機関接続！ 見せてやるよ、『蒼』の力を！」

グレンデルは訝しげな顔をした。

（『蒼』の力？ 一体何の事だ！？）

グレンデルが、そんな事を考えていると煉は最後の発動コードを言葉にする。

「フレイブルの魔導書、起動……！」

煉はそう発動コードを唱え終わった。

そして、フレイブルの魔道書は起動した……

嘆きの竜皇、グレンデル（後書き）

少し長かったんで、2つに分けます。

2つ目のアルカナと確立事象（前書き）

キャラの性格が合ってるか、不安です。

ちなみに煉は1つ目のアルカナをBLAZBLUEの世界で手に入れます。

2つ目のアルカナと確立事象

（よし、行ける！）

「ブラッドカイン！」

煉がそう叫ぶと、煉の体を赤黒いオーラが包む。

「な、何だソレは……」

「……行くぞ」

驚くグレンデルをよそに、煉は攻撃を始める。

「インフェルノディバイダー！」

煉がそう叫びながら、下から上に向けて剣を振るう。

その攻撃はグレンデルに直撃した。

（くっ！？ また魔力を！？）

グレンデルは、煉の攻撃でまた魔力を吸い取られてしまった。

「ヘルズファンゲ！」

煉はそのままの勢いで、グレンデルに突撃する。

「ぐぬっ！ この！」

攻撃を喰らったグレンデルは、反撃しようとするが……？

「デットスパイク！」

煉の追撃で反撃が阻止される。

「ぐあっ！」

煉の攻撃によりグレンデルが近くの石柱にぶつかり、石柱が音を立てて壊れた。

「よしっ！」

煉は残り時間が何分か、ラグナにテレパシーで聞く。

「ラグナ！ あと何分だ！？」

「あと1分しかないぞ！ 攻撃を畳み掛けろ！」

「わかった！」

煉がそう返事してテレパシーを一旦切ると、グレンデルが起き上がってきた。

「クソッ！ 調子に乗るな！！」

グレンデルが怒りながらそう言って剣を逆さまにし、それを前に突き出しながら突進した。

「危ね！」

煉はギリギリで、その攻撃を右に動いて躲す。

「まだだ！」

が、グレンデルは同じ攻撃をもう一度繰り出す。

「っと！」

煉は今度は、余裕を持って左に動いて攻撃を躲す。

「ちょこまかと！」

グレンデルがこつちを振り向いた瞬間に????

「カーネーシザー！」

煉はグレンデルの攻撃の隙を付いて、高威力の技を放った。

「うおおおおー！」

グレンデルはそれを剣で弾こうとするが……

「何！？」

グレンデルの剣に罅^{ひび}が入ってしまった。

「ていりやあああー！」

煉は追撃で衝撃波を放つ。

パリ??????ン！

そんな音と共に、グレンデルの剣はボロボロになった。

「そんな！？馬鹿な！？」

グレンデルは、これには本気で驚いた。自分の自慢の剣をたったの一撃でボロボロにされたのだから。

「煉！！ 残り15秒だ！！」

ラグナはテレパシーで、残り時間が少ない事を煉に教える。

「わかった！」

煉は、グレンデルを両目で見据えながら大技を使おうとする。

「させるか！」

グレンデルは煉に向かって突撃する。

「ちっ！」

煉はそれを避ける。

「14、13、12、11、……」

ラグナがカウントダウンを始める。

「ふん！」

グレンデルはボロボロになった剣で煉を攻撃する。

「つく！？」

煉はそれを何とかギリギリで躲す。

「10、9、8、7、6……」

が、制限時間が近づいていた。

「これで！」

グレンデルが煉に向かって袈裟斬りを放とうとする。だが?????

「遅えよ……」

一足遅かった。煉の攻撃の準備はもう整っていたのだ。

（しまった！）

グレンデルは思った。『この攻撃を喰らったら不味い』と……

「見せてやるよ……『蒼』の力を！」

グレンデルは距離を取ろうとする。だが、煉は片手剣で切り付けてそれを阻止する。

「くっ！」

「まだだ！」

煉がそう言っていると、片手剣が鎌のような形に変形した。

「何！？」

「恐怖を刻み込んでやる……」

煉はそう言って、グレンデルを何度も鎌で斬り付ける。

「ぐぬっ！」

グレンデルは苦悶の声を上げる。だが、煉は攻撃の手を緩めない。

「地獄も天国もねえよ、あるのは虚無だけだ」

そう言っていると、右肩から翼が現れてグレンデルから魔力を吸収する。

「がは！」

グレンデルはまた苦悶の声を上げる。そして、煉は鎌に『蒼』の力を溜める。

（これで終わりだ！）

煉はその鎌をグレンデルに突き刺す。

「ぐわああああー！」

グレンデルはその攻撃をもろに喰らって、後ろに吹っ飛んだ。そして、煉は後ろを振り向いて右手を横に振った。

「これが……『蒼』の力だ」

「2、1、0……起動を終了する」

ラグナがそう言つと、蒼の魔道書は起動停止した。

「ぐっ！」

煉は蒼の魔道書が止まると同時に、その場に膝を付く。

「はあ、はあ、はあ……」

「おい！ 煉！ 大丈夫か！？」

「大丈夫……じゃないかもな」

煉の体はとても大丈夫とは言い難がった。蒼の魔道書をまだ完全に使いこなせていないのに使った反動による疲れと、無理な動きをした所為でさつきグレンデルに刺された場所の傷が開いてしまったのだ。

「……グレンデルは？」

煉は体を無理矢理動かして、グレンデルの方を見る。

そこには……

「……」

煉を見下ろしながら、グレンデルが立っていた。

「俺の負け……か」

煉はそう思った。だが、グレンデルの口から出た言葉はそれとは真逆だった。

「いや、お前の勝ちだ」

「何？」

煉は訝しげな声を上げる。すると、グレンデルは自分の体を指差

した。

「見る」

「っ！？」

煉はその光景に驚いた。グレンデルの体が粒子状になり始めたからだ。驚いている煉に、グレンデルが声を掛ける。

「驚いたか？ マスターガーディアン アルカナの守護者は、倒されると粒子状になって消えるのだ。知らなかったのか？」

「あ、ああ」

「ふっ、まあ良い。ほれ、アルカナだ。受け取れ！」

グレンデルがそう言っていると、グレンデルの右手に赤い光が集まった。そして、右手のそれは勝手に動き、煉の体内に入っていた。

「これでお前は、2つ目のアルカナを手に入れた。私の他にも8体アルカナを守っている者がいる。そやつらと戦う時に私を呼べば力を貸そう。では、またいずれ」

グレンデルはそう言い残すと、完全に粒子となって消えた。そして、周りの景色がこの場所に来る前の遺跡に戻っていった。

「終わったか……」

煉はそう呟く。

「くっ！」

煉は痛みに耐えながら立ち上がった。

（はぁ、早く帰って梢に治療してもらわないと）

そう思いながら、右手で扉を開けた。そして、そこには……

「煉！？」

ノエルがいた。

「ちよつと、煉！？ 大丈夫！？」

「これが大丈夫に見えるなら、俺は眼科に行く事をお勧めするぞ」

煉は軽口を言う。

「早く戻って梢に治療してもらわなきゃ」

ノエルがそう言っていると、煉の肩に手を回す。そして、ノエルは転送

魔法を唱える。

「転送！」

そう唱え終わると、煉とノエルはその遺跡から消えた。

―視点チェンジー

第97管理外世界「地球」 海鳴市藤見町

「転送完了」

俺とノエルは、ノエルの転送魔法で俺の家の裏庭に転送してきた。

「早く家の中に入りましょう」

「そうだな」

俺らは表の庭の方に回る。と、そこへ……

「あれ？ 何やってるんですか？ 2人とも…… って、煉！ どうしたんですか！？ その怪我！？」

俺達に女性の声が掛かった。

「あつ、梢！ ちょうどいい所に」

「よう、梢」

彼女は梢。俺の使い魔の1人だ。

「あいさつはいいですから、早く家の中に！ すぐに治療しますから！」

俺は梢に連れられて家の中に入り、ソファ―に座る。そして、梢は俺の前に立つ。

「回復……」

梢がそう呟くと、俺の額に手を乗せる。すると、俺の体の傷がみ

るみる塞がつていった。

「はい、これで傷は塞がりましたよ」

「ありがとう。相変わらず凄いな梢の魔法は」

「いえいえ、そんな事ありませんよ」

俺は梢にお礼と褒め言葉を言う。

（謙遜しなくても良いと思うけどな）

「煉、他に違和感はありませんか？ あるなら直しますけど」

梢がそんな事を聞いてきたので、自分の体を調べる。

（梢に治してもらったから大丈夫だとは思うけど……）

そうやって調べていると、少し違和感を感じた。

（疲労感か。早めに寝て休めば何とかなるだろうけど）

「いや、大丈夫だ」

梢にはそう言う事にした。

「そうですか。わかりました」

「はあ、良かった」

ノエルも安心したみたいだな。そんなやり取りをしていると、ラグナがドアを開けてリビングに入ってきた。

「煉、ちよつと来い」

ラグナはそう言いながら手招きをする。そして、リビングから出て行った。ちなみに今日、ラグナは仕事は休みだ。

（何だ？）

俺はラグナの後を追って、リビングを出た。ラグナは玄関の辺りで止まり、こちらを振り向いた。

「ハア、心配かけんなよ。こっちまでヒヤヒヤしただろうが」

「すまん」

「その事はまあ、いい。だが、『蒼』の魔道書は俺が許可しない限り使つなよ。まだ完全に使いこなせていないんだからな。しばらくは制御の特訓だ」

俺はラグナから忠告を受ける。

「ああ、わかった」

俺はそれを了承した。だが、俺には気になる事があった。

「あれ？ 気になってたんだけど、ジンは？」

そうジンは居ないのだ。たしか、ジンは今日は仕事が休みだったはずなんだけど……

「あいつなら今、夕飯の買い出しに行かせてる。もうすぐ帰ってくるんだろ」

ああ、それで居なかったのね。俺がそう心の中で思っていたら玄関のドアが開いた。

「ただいま」

（つと、この声は……噂をすれば何とやらだな）

「お帰り、ジン」

「よう、お帰り」

そこにいたのは、話に出ていたジン……ジン「キサラギだった。ちなみに、ラグナとジンは実の兄弟だ。全然、似ていないし苗字も違うけどな。」

「ああ、ただいま。兄さん、煉」

「ジン、何を買って来たんだ？」

俺はジンの買い物袋を指差しながら、何を買って来たのか聞く。

「ん？ 魚に肉に野菜と色々買って来たよ」

俺はそれを聞いて、頭の中で今日の晩飯を考える。

「そうか。昨日は肉料理だったから、今日は魚料理にするか。ラグナ、手伝って」

「ああ」

「じゃあ、僕はガレージにいるからできたら呼んでくれ」

ジンはそう言うとかレージに向かって行った。俺とラグナはリビングを通り、キッチンへ向かう。

「煉、今日の晩飯は何？」

キッチンで料理の準備をしてる時に、ノエルがそんな事を聞いてきた。

「今日は魚料理だ」

「そうなんだ。手伝ったほうがいいかな？ 煉、一応怪我したし」
「ノエル、今日の当番は俺とラグナだから別に大丈夫だよ。それに料理位できるよ」

「そっか、じゃああっちでテレビを見てるね」

ノエルはそう言っていると、ソファーの方に向かいテレビを見始めた。

「じゃ、そろそろ始めるか」

「だな」

そう言っていると、ラグナと2人で料理を始めた。

その後、晩ご飯も食べ終わり風呂にも入って、後は寝るだけとなったのだが……

「眠れない……」

時計の針を見ると、12時ジャストだった。

「はあ、何か飲むか……」

俺は自分のベッドから出て、自分の部屋がある2階から1階に降りる。そして、リビングに来たがそこには先客がいた。

「ノエル？」

そこに居たのはノエルだった。

「あつ、煉」

「ノエルも眠れなかったのか？」

俺はそう聞きながら、リビングの電気をつける。

「うん……」

「ホットミルクを作って持っていくから、ソファーで待ってて」

「わかった」

ノエルはそう言ってソファーに座った。俺は、冷蔵庫から牛乳を取り出してホットミルクを作り始めた。

それから数分後、ホットミルクが出来たのでマグカップに注いで

ノエルに持つていく。

「はい、お待たせ」

「ありがとう」

ノエルはホットミルクを受け取りながら、お礼を言った。

（ノエルにお礼を言われると、ちよつと恥ずかしい……）

俺がそんな事を考えていると、ノエルが声を掛けてきた。

「ねえ、煉」

「何？」

「その、ありがとうね。私なんかと一緒に居てくれて……」

俺は、いきなりそんな事を言つて来たノエルに首を傾げる。

「何言つてんだ？」

「だって、私……煉の事を……」

「それ以上言うな！」

俺はノエルが言おうとした事を遮った。ノエルが何を言おうとしたのかわかったからだ。

「……別にアレはお前が悪いわけじゃないだろうが。気にし過ぎだ」

「でも！」

俺は、そんな事を言おうとしてるノエルの頭に手を乗せる。

「へ？」

俺はそのまま手を動かし、ノエルの頭を撫でる。

「俺は気にしてないから……な？ だから、お前も気にするな」

「だけど……」

ノエルよ、そんな事を言い続けるなら俺にも考えがあるぞ。

「これ以上言い続けるなら……お前のポエムを大声で朗読するぞ？」

「なっ！？ お願い！それは止めて！？」

ノエルは涙目になりながら、そう懇願してきた。

「だったら、金輪際こんりんざいそんな事を言わないでくれよ」

「うっ、分かった……」

ノエルはまだ涙目だ。

（何だコレ？俺が悪い事したみたいじゃねえか……）

俺は罪悪感を感じたので、まだ頭を撫で続ける。すると、ノエルが不服な声を漏らした。

「うう、私の方が年上でお姉ちゃんなのに……」

ノエルがそんな事をぼやき始めたので、撫でるのを止めて頭から手を離す。

「あつ……」

ノエルが名残り惜しそうな声を上げたが、俺は気付かない振りをした。

「さあ、さつさとホットミルクを飲んで早く寝なよ。明日、仕事だろ」

「つて、そう言う煉も明日学校でしょ？」

「まあ、そうだけど」

俺はそう言っていると、少しぬるくなったホットミルクを飲んだ。ノエルも俺につられて、ホットミルクを飲む。それを何回か繰り返ししていると、俺もノエルもホットミルクを飲み終えてしまった。そして、マグカップを片付け終わり、俺らはそれぞれの部屋の前に来ていた。ちなみに、ノエルの部屋は俺の部屋の向かい側だ。

「それじゃ、お休み。ノエル」

「うん、お休み。煉」

そう言って、お互いに自分の部屋に入った。俺はそのままベットに横になる。そして、俺は明日の事を考えていた。

（明日は午前授業だから、終わったらすぐに「翠屋」に行かなくちゃ……それ……で……）

俺はそんな事を考えながら、寝てしまった。

この世の何処かに在る場所で、とある人物がいた……

「この確率現象は、確立現象に完全に確定したようね……」

その人物は、紅茶を片手にそう呟いた。

「お嬢様、いかが致しますか？」

その隣にいた人物は、紅茶を飲んでいる人物に今後の対応の指示を仰ぐ。

「今は様子見よ。アイツが現れない限りね」

「了解致しました、お嬢様」

会話の内容から、先ほどから紅茶を飲んでいる人物ともう一人の人物は主従関係にあると推測できる。その「お嬢様」と言われた人物は頭の中で考えを巡らせていた。

（さて、こっちの方は面白い事になりそうね）

そう言つて、何かの映像を見始める。そこには、煉が映っていた。「不完全ながら『蒼』の魔道書を使えるなんて……さすがは、紅蓮の王かしら」

その人物は、顔に笑みを浮かべる。そして、ここに居ない人物に呟く。

「さて、私を退屈させないで頂戴ね、煉」

2つ目のアルカナと確立事象（後書き）

一応、次回も戦闘はあります。

魔物と再会（前書き）

睡魔と戦いながら書いたので、文章がおかしい所などがあったり、グダグダなってる可能性が高いです……

魔物と再会

翌日 AM 6:30

「ピピピ！ ピピピ！ ピピピ！
うるさい」

俺はそう呟きながら、目覚まし時計を右手で思いっきり止める。
そして、欠伸をしながら大きく伸びをする。

「んん」。さて、起きるか」

俺はベッドから出て、1階の洗面所に向かった。そして、顔を洗い、歯を磨いてリビングに向かった。

「あつ、おはようございます。煉」

「おはよう、梢」

リビングには、梢がいたのでおはようと声を掛ける。

「ノエル達はまだ寝てる？」

俺は、ノエル達がまだ寝てるかどうかを聞く。

「はい。まだ、寝ていますよ」

「そうか。じゃ、俺達で朝飯を作っちゃおうか？」

「はい。わかりました」

そう言つと2人でキッチンに向かつて、朝食を作り始めた。

「おはよう……」

それから数十分後、ノエルが目を擦りながらリビングに入ってきた。

「おはよう、ノエル」

「おはようございます、ノエル」

「うん、おはよう……」

ノエルは、まだ眠たそうに目を擦る。

「ノエル、先に顔を洗って歯を磨いてきて。もうちょっとで朝食が出来るから」

「うん、分かった……」

ノエルはそう返事すると、よろよろと洗面所の方に歩いて行った。内心、「よろよろ歩いて大丈夫か？」と思いながら朝食作りの続きをしていると、ガツンとゆう良い音と共にノエルの悲鳴が聞こえた。
「痛った????!」

「梢、すぐ戻るから」

俺は、梢にそう言ってから廊下に向かった。

「おーい、大丈夫か ノエル？」

「壁におでこ、ぶつけた……」

ノエルがおでこを抑えながら、床でうずくまっていた。

俺はしゃがんで、ノエルのおでこを触りコブが出来ていないか確認する。

「どれ、コブは……出来ていないな。うん、大丈夫だ」

「うう、痛い……」

「ほら、さっさと顔洗って来い。一応氷を用意しておくから」

「うん、わかった」

ノエルはおでこを抑えながら、洗面所に向かった。俺は台所に戻り、氷嚢ひやうのうを用意した後、梢と一緒に料理の続きを作り始めた。

「おはよう」

「おはよう、煉」

「ああ、おはよう。ラグナ、ジン」

俺と梢が料理を作り終わりテーブルに並んでいる時に、ラグナとジンが起きてきた。

「やっぱり、さっきの悲鳴はノエルか……」

「大方、壁におでこでも打ったんだと思うよ。兄さん」

2人は氷囊をおでこに乗せているノエルの姿を見て、思いを口にする。

「うう……」

ノエルは、恥ずかしそうに顔を伏せる。

「さて、全員そろったことだし飯にしようか」

俺がそう言くと、みんな自分の席に座った。そして、いただきますの挨拶をして朝ごはんを食べ始めた。

「ごちそうさまでした」

それから数十分後、みんな朝食を食べ終わった。

時間を確認するとそろそろ出た方がいい時間になっていた。

「つと、そろそろ出た方がいいな」

俺は自分の鞆を取り、そのままりビングを出て玄関に行く。

「それじゃ、行ってくるから」

「おう」

「ああ」

「行つてらっしゃい」

「行つてらっしゃい、煉」

みんなから様々な返事が返ってきた。

「行ってきます」

俺はそう返事しながら、玄関のドアを開けて学校?????私立聖祥大学付属高等学校に向かった。

「おはようー！」

「おう、おはよう」

学校に着いて、教室に入ると挨拶されたので俺も挨拶をした。

「皆、おはよう」

それから数分後、担任の教師が来た。

「それじゃあ、HRを始めるわね」

教師がそう言うのと、HRが始まった。俺はそれを聞きながら欠伸あくびをした。

ー視点チエンジー

煉が学校で授業を受けている頃、「翠屋」では……

「ただいま、お父さん！お母さん！」

「お帰り、なのは」

「お帰りなさい、なのは」

高町夫妻が久しぶりに帰ってきた娘を迎えていた。

「フェイトちゃんにはやてちゃんも久しぶりね」

「はい、久しぶりです」

「お久しぶりです。桃子さん」

フェイトとはやても桃子さんに挨拶する。

「生ヴィヴィオだ！」

「うう、くるしい……」

「おい、美由紀。ヴィヴィオが苦しがつてるぞ」

その横ではなのはの姉、高町美由紀がなのはの娘????高町ヴィヴィオを抱きしめていた。それをなのはの兄である、恭也がたしなめる。

「スバルちゃんにティアナちゃん、久しぶりだね」

士郎は、なのは達の後ろにいる少女たちに声を掛ける。

「はい！ お久しぶりです！」

「お久しぶりです」

「エリオ君とキャロちゃんもね」

その横で桃子はフェイトの子供????エリオとキャロに話しかける。

「お久しぶりです！」

「お久しぶりです、桃子さん」

「クリュー！」

「フリードちゃんもね」

桃子は、キャロの肩に乗っている小さい竜????フリードの頭を人差し指で撫でる。

「あれ？シグナムさん達は？」

美由紀は、はやての守護騎士であるシグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラが居ない事に気付いた。

「今、シグナム達には悪いけど、先に探索に行ってもらってるんです」

はやてが美由紀の疑問に答える。

「へえ、そうなんだ」

そんなみんなの様子を見ていた士郎は、ある事を思い出していた。
(あつ、煉君になのは達が今日帰ってくるっていう事を伝えるの…

…忘れてた)

「……入りづらい」

「右に同じだ」

そんな士郎たちの様子を、キッチンの影から見ていた人物???
?ノエルとラグナは小声で話していた。

「どうする?」

「どうするって言われても……。でも、一応挨拶をしとかなきゃだし……。でもでも……」

「はあ」

ノエルが独り言を喋り始めたので、ラグナはそれを見てこっそり溜息をつく。

ノエルの独り言は、士郎達がキッチンに来るまでの間ずっと続いたという。

ー視点チエンジー

「あゝ、やっと終わった……」

俺は学校の校門を出て、そう呟く。

(今日は、バイト休みだしどうしようか?)

俺が、午後どうするか考えていると車が俺の前に止まり、中にいた人物がドアの窓を開けて声を掛けてきた。

「煉」

「アリサ先輩? こんにちは」

車から顔を出した人物は、アリサ・バニングス。俺が通う学校の先輩だ。

去年、卒業しちまったらしいけどな。

「私もいるよ」

「すずか先輩もこんにちは」

この人は月村すずか。アリサ先輩と同じく、俺の通う学校の先輩だ。

「2人ともどうしたんですか？ 今日、大学だったんじゃない？」

「大学だけど、今お昼休みだから翠屋に行こうとしてんの」

「なのはちゃんにも来てるらしいから」

「えっ？ なのは先輩が？」

えっ？ どういう事？ なのは先輩が帰ってきたって……

「士郎さんから聞いてない？」

アリサ先輩がそう聞いてきたので、心当たりがない俺は首を横に振る。

「まあいいわ。ほら、乗りなさい。翠屋まで乗せていってあげるから」

「えっ、いいんですか？」

「何を遠慮してのよ。ほら、乗った乗った」

「えっと、それじゃ失礼します」

俺は、先輩の言葉に甘えて車に乗ろうとした瞬間????

「!？」

????頭にノイズが走った。

「煉？ どうしたのよ？」

「煉君？」

俺がなかなか車に乗らないので、先輩達が心配そうな声を上げる。

（この頭にノイズが走る感じは……魔物か！）

「すいません！ 俺、急用を思い出しました！ それでは！」

俺はその場から走り出した。

「ちよっと！？ 待ちなさい！ 煉！」

「煉君！？ どうしたの!？」

後ろから先輩達の声が聞こえるが、今は気にしてられない。

（クソッ！ こっちら、昨日の戦いで疲れが残ってるっていうのに！）

俺はそのまま走り、魔物の気配がする場所????海鳴臨海公園に向かう。

（と、その前に！）

俺はリンクを使い、ノエル達に知らせようする。

「おい、ノエル！ 聞こえるか！」

「ひゃ！ 何だ、煉か……どうしたの？」

「魔物が現れた！ 今すぐ来れるか！？」

「えっと、ゴメンね！ 今すぐ行けそうにないんだ……」
ん？ 何かあったのか？

「ノエル、何かあったのか？」

「そ、その、土郎さんの娘さんに……ちょっと……」

「OK、何となく分かった。なのは先輩に絡まれて動けないと」

「よ、よくわかったね。って、あれ？ 煉ってなのはさんの事知ってるの？」

ノエルがそんな事を聞いてきた。

まあ、その事は話してなかったからな。

「その事は後で話す！ ノエルがダメならラグナは！」

「すまん、煉。俺も絡まれて動けない……」

ラグナが割り込んできてそう言った。

クソッ！ ラグナもダメか！ こうなったら、ジンに！

「オイ！ ジン！」

「話は聞いていた。が、僕も無理だ。仕事から手が離せなくてね」

……全滅、だと？

（ちっ！ しょうがねえ！ 1人で行くしかないか！）

俺はリンクを切り、そのまま走って公園を目指した。

だが、俺はこの時気付かなかった。

俺を見ている4つの視線に……

―視点チェンジー

「今の、煉……だよな？」

煉を見ていた視線の主の1人????ヴィータが、他の視線の主
に意見を求める。

「アレは……煉だな」

「煉君……ですね」

他の視線の主????シグナムとシャマルがヴィータの言う事に
同意する。

「あの急ぎ様、何かあったのではないか？」

もう1人の視線の主????狼状態のザフィーラが煉が走ってい
った後を見ながら、そう口にする。

「……追いかけてみるか？」

「そっこののは好まないんだが、仕方ない」

「そうね。追いかけてみましょう」

「うむ」

シグナム、シャマル、ザフィーラの3人はヴィータの案に同意し、
煉の後をつけることにした。

知らなくていいものがあるとは知らずに……

「はぁ、はぁ、ここら辺か……？」

煉は走って乱れた息を整えながら、周りを見渡し始めた。

「ん？ これは結界？」

煉は結界が張られるのを感じた。

すると、公園内にいた人達が1人残らずに消えた。

煉は、それを魔物がやった事と結論付けた。

「何処だ……何処にいる……」

煉は魔物を探しながら、能力「ゲート」を使い片手剣と盾を取り出して構える。

（っ！？ 後ろか！）

すると後ろの方から何者かの殺気を感じ、煉は振り返りながら盾を構えた。

何かが攻撃を仕掛けるが、盾に攻撃を塞がれる。

だが、攻撃の衝撃が煉の体を襲い、錬は大きく後ろに後退した。

煉が衝撃を受けたさいに伏せた顔を上げると、煉を攻撃した者が姿を現した。

「グルルルルルッ……」

「お前は……」

そこにいたのは、体に巨大なクサビが刺さり、体中に鎖が巻きついていた魔物だった。

煉は、自分の頭の中にある魔物の情報と照らし合わせて、目の前の魔物の正体を探り対策を立てようとするが……

「グオオオオオオ！！」

魔物が攻撃してきたので、攻撃を回避しようとする。

「そう簡単に探らせてくれねえか！」

煉は右に避けて攻撃を回避する。だが、今度は左から攻撃が来る。
「ちっ！」

煉は、その攻撃を後ろに後退して躲す。が、魔物は煉を執拗に攻撃してくる。

「ちよつと、イラッと来てるんだけど！」

魔物の攻撃に、煉は正体を探る事がまともに出来ない。そのせいで煉はイライラして来てるようだ。

「ああ、もう！ めんどくさい!!」

煉は、魔物の正体を探るのを一旦止めて、魔物の攻撃を躲しながら魔物に攻撃をしていった。

「てりやああああ??!!」

煉は剣を振りかぶるが……

「くっ！」

魔物が素早く動き、その攻撃を躲す。

（もう一度!）

煉はそう思った後何度も攻撃をするが、その度に魔物が素早く動いて攻撃を躲した。

「ちっ！ ちょこまかと！」

さらに攻撃をしようとするが、やはり素早い動きで躲されてしまった。

（あの素早い動きをどうにかして止められれば……ん？ 止める？ そうだ!）

煉は何か考えついたのか、そのまま後ろに下がりながら「ゲート」を使い片手剣と盾をしまい、

日本刀のようなものを取り出した。

「グオオオオオ!!」

魔物は雄叫びを上げながら、煉に接近してきていた。煉は日本刀の柄に触りながら、小声で何かを呟いた。

「氷剣……ユキアネサ」

そう呟くと日本刀????ユキアネサを抜刀し、地面に突き刺した。

「グルッ!？」

すると、煉に近づいていた魔物が驚いたような声を上げる。何故なら、自分の手足が何故か氷漬けにされていたからだ。

煉は、自分の手足を動かそうともがいてる魔物に接近した。

「凍れ！」

そして右腕を突出し、ユキアネサの能力「フロストバイト零刀」で魔物を冷氣で完全に氷漬けにした。

「少しの間、そうしている」

煉はそう言つて、正体を探るのを再開した。

少しして、煉は驚いた顔をした後、呆れた顔をした。

（っ！？ 俺の馬鹿！ 何で早く気が付かなかったんだ……）

煉は目の前の魔物の正体は何なのか分かったようだ。

（こいつ……フェンリルだ！）

フェンリル……ラグナロク世界終末の時に解き放たれるという魔物。それが目の前にいる魔物の正体だった。

だが、煉は目の前のフェンリルに疑問を持っていた。

（おかしい……、フェンリルは性格こそ凶暴だが理性はあつたはずだ。だが、このフェンリルには理性が感じられない……。理性が無いのは、ただ単に暴走しているからなのか？ あるいは……）

煉が色々考えていると、フェンリルを氷漬けにしていた氷が砕けそうになっていた。

（ちっ！ 考えるのは後か！）

煉は「ゲート」を発動させると、ラグナが使っているのと同じ型の大剣を取り出した。そして煉はその剣を左手に持ち、右手にユキアネサを持って構えた。

そして、煉が武器を構えた直後、氷がひび割れて中からフェンリルが飛び出した。

「グルルルル……」

フェンリルの唸り声と、煉を見据えるその視線には怒りの感情が込められていた。

「行くぞ！」

煉はそう叫ぶと、そのままフェンリルに突撃して行った。

フェンリルが煉を攻撃しようと、右前脚を振り上げるが……

「よっ！」

煉がスライディングをして、フェンリルの腹部の辺りに滑り込みそれを躲す。

続けざまに、両手に持った武器でフェンリルの腹を攻撃した。

「グルッ！？」

そして煉は、そのまま武器で空中に打ち上げ、両足でドロップキックを腹に叩きこんだ。

「グアッ！？」

フェンリルは、煉のドロップキックで木に叩き付けられてダウンした。

煉は、空中でドロップキックをした反動を使い、バク転して着地をした。煉が着地すると同時に、フェンリルはダウンした状態から起き上がった。

「グオオオオオオオオ？？？？！！！」

起き上がったフェンリルは、怒りの感情を込めた咆哮を上げた。

「くっ！」

煉はフェンリルの咆哮に耳を塞いだ。だが、フェンリルはその隙を見逃さなかった。

「グオッ！」

フェンリルは両方の前足を使って、煉を攻撃する。煉は攻撃を避けようと左へ動いたが、躲しきれずに右脇腹に攻撃を受けてしまった。

「がっ……！！？」

煉の右脇腹から鮮血が飛び散る。フェンリルはさらに煉を攻撃しようとしてくる。

煉は左手で脇腹を抑えながらフェンリルの攻撃を躲すが、行き止まりに追い詰められてしまった。

（しまった！？ 追い詰められた！？）

フェンリルはチャンスと言わんばかりに、煉に襲いかかる。が……
「グルッ!？」

「な、何だ!？」

フェンリルは、何かの攻撃を受けて体制を崩した。

「煉!」

「えっ、ヴィータ?」

攻撃したのは、先程煉を見ていた人物の1人であるヴィータだった。

「って、おい! 大丈夫か!? 血が出てるじゃねーか!」

煉はヴィータのいきなりの登場に驚いた。だが、煉はヴィータの攻撃でフェンリルに隙ができたので、チャンスと思い武器を構えながら走った。

「っ! 今だ!」

「あっ、おい! 煉!」

煉はさつき落とした大剣を拾い、2つの武器を使いフェンリルに突き刺す。

突き刺した部分から、血が噴き出す。

「グルアアアアアア??!」

フェンリルは悲鳴のような声を上げた。

煉はその声を聞いてすぐ武器を引き抜き、大剣を「ゲート」へしまった。

「突き刺され!」

煉は氷翔剣を4つ、フェンリルの四肢に突き刺す。そして、氷翔剣が突き刺さった部分が凍り、フェンリルは動けなくなってしまった。

「これで、終わりだ……」

煉はフェンリルに近づき、フェンリルの目の前でユキアネサを地面に突き刺した。

すると、さつき閉じ込められた時とは比べ物にならない冷気がフェンリルの周りに集まった。

「何だよ、これ……」

ヴィータは、煉の周りに集まりだした魔力に動揺していた。

「グアッ！」

フェンリルは抜け出そうともがくが、さっきよりも氷が固く抜け出せない。

「凍りつけ……」

「グ……ル……」

煉がそう呟くと、フェンリルはまたに氷漬けになった。だが、氷漬けになったにも関わらずどんどん氷は大きくなっていく。

そして、もう氷は限界近くまで大きくなった。それを見た煉はまた言葉を呟く。

「煉獄氷夜……」

煉がそう呟いた瞬間、氷が一気に割れてフェンリルはその場に倒れた。

「す、すげえー……」

ヴィータは、目の前の出来事にそう呟く。

「う、くっ!？」

煉は、脇腹を押さえながらその場に座り込んだ。

(くそっ、痛つてえ……)

「おい、大丈夫か!? 煉!？」

ヴィータは座り込んだ煉に駆け寄る。

「大丈夫……じゃないな」

「……なあ、煉」

「何だ、ヴィータ?」

「何なんだよ……あの怪物」

煉は説明しようとするが、ヴィータに遮られてしまう。

「町でいなくなった煉がいたから、後をついて来たら……いきなり結界が張られるし! 怪物が出てくるし! 煉が脇腹を怪我するし!

魔法を使えないはずの煉が魔法を使ったり……もう訳がわかんねえよ!！」

ヴィータは涙目になりながら、そう喋った。

「ヴィータ……」

「煉！」

「は、はい？」

「ちゃんと1から10まで説明してもらっぞ！」

「……わかりました」

（はぁ、何だか面倒な事に気がする……）

魔物と再会（後書き）

PVが10000を超えたら、執筆中である別の小説の予告みたいな短編を載せたいと思います。

帽子の男と復活の魔狼（前書き）

三週間ぶりに更新出来た……

今回は、短めです。

帽子の男と復活の魔狼

あの後、シグナムにシャマル、ザフィーラが来てみんなが倒れるフェンリルを見て驚いた後、シャマルが脇腹の治療してくれた。さらに、俺とフェンリルとの戦いでボロボロになった公園を、元通りに戻してくれた。

俺には、壊れたものを元通りにできる『術式』なんて使えないから、正直助かったよ。

その後、何故かフェンリルは粒子状になって消えたけど……。

で、現在……

「絶賛説明中ですよ」

「何を言っているんだ？ 煉？」

「いや、何でもない……」

今、ヴィータに公園の人気の無い場所に連行されて、絶賛説明中です。

「もう一度聞けど！ 煉、あの怪物は何なんだ？」

「だ〜か〜ら〜！ フェンリルって魔狼だって言ってるでしょうが！」

「だから魔狼って何だよ！」

どうしよう、さっきからこの会話がループしてんだけど……。

誰か！ このループから俺を助け出して！

「おい、ヴィータ」

「なんだよ！」

「お前じゃ話が進まない、代われ」

シグナムは黒いオーラを出しながら、ヴィータに向かってそう言った。

あの、何か怖いんですけど……

「わ、わかった」

ヴィータはそう言うと、シグナムと話をするのを交代した。

「あの獣が、フェンリルという名前なのは解った。では、何故魔法が使えなかったお前が、魔法を使えるのかを話してもらおうか？」

「えっと……それも話さなきゃ、ダメ？」

「ダメだ」

ですよねー。

「まず、俺が使ったのは魔法じゃない。コイツの能力『フロストバイト零刀』だ」
俺は『ゲート』から「ユキアネサ」を取り出し、説明する。

「零刀だと？」

「シグナム達も見たる？ 俺がフェンリルと戦った場所の木が凍っていたのを。アレがこの「ユキアネサ」の能力だ」

俺はそう言つて、「ユキアネサ」をしまう。

「氷結能力か……」

「ああ、そうだ。炎でさえ凍りつかせてしまうほどのな。それで、そんな能力を使えるようにしてるのが俺が使っている『術式』だ」
「術式？」

シグナムのその言葉に俺は頷き、話を続ける。

「術式っていうのは、シグナム達が使っている魔法と違って体内で生成される『リンカーコア』の魔力じゃなくて、空気中にある『魔素』と呼ばれるものを消費して使うものなんだ」

「魔素？ 魔力とは違うの？」

今度はシャルマルが俺に質問してきた。

（違いか……）

「違いは、魔素は有毒で魔力が無毒ってところかな？」

「えっ？ そうなの？」

「うん。でもまあ、似たようなものと思ってくればいいよ」

「そう、わかったわ」

「ああ、それと術式には『術式適正』というものがあるんだ」

「術式適正？」

すると、今度は今まで黙っていた狼……もといザフィーラが声をあげた。

「簡単に説明すると、この空間に魔素が100あったとしよう。俺がある術式を使うと、空間中の魔素が80ほど残る。だけど、別の誰が俺と同じ術式を使うと空間中の魔素は90ほど残るんだ」

「なるほど、適性が高い程同じ術式でも使う魔素が少なくなるという事だな」

「そういうこと」

「……おい、煉」

俺がザフィーラと話終わると、ヴィータが話しかけてきた。

「何だ？ ヴィータ」

「私、まだ一番聞きたい事を聞いてねえよ……」

ヴィータは、腕を振るわせながら言葉を続けた。

「お前、今まで何処で何をしていたんだよ？ 答える！ 一年半も居なくなりやがって！ 私たちがどれだけお前を心配したと思ってんだ！」

「……ごめん、その事も話さなくちゃな。俺がこの一年半何をしていたのか……」

俺は、シグナムの顔を見て続ける。

「あのさ、先輩達にも話したいんだけど良いかな？」

「それは私も思っていた所だ。お前の口から、主はやて、テストロツサ、高町にも説明した方が良いかもしれんからな」

「ありがとう。ところで、先輩たちは翠屋に？」

「ああ、そうだ」

（あつ、そつえば……）

俺は、聞きたい事があつたのを思い出したのでシグナムに聞くことにした。

「そういえば、何で地球に帰ってきたんだ？ あっちで、はやて先輩の造った部隊……機動六課だっけ？ その仕事があつたんじゃないの？」

「いや、今回我々が地球に帰ってきたのは任務でだ」

俺は、シグナムの言葉に首を傾げる。

「任務？」

「そうだ。この地球でロストロギア反応があり、その調査に来たわけだ」

「で、その調査途中に俺を見つけたと」

「その通りだ」

シグナムのロストロギアの話聞いた瞬間、俺の頭の中で、先輩たちが調査に来たロストロギアの正体が分かってしまった。

（その、ロストロギアって……まさか、アルカナか？ もし、そうだとしたら……ヤ、ヤバイぞ……）

俺は、自分の考えに納得してしまった。

（そうだとしたら本当にヤバイぞ！先輩たちが俺の敵になる可能性が……！）

「煉？ どうした？」

俺の意識が、シグナムの声で現実に戻された。

「いや、何でもない。じゃ、翠屋に行こうか」

「そうだな。場所は覚えているか？」

「もちろん」

俺がそう言いながら歩き出すと、シグナム達は俺の後について来た。か？？？？

「ん？」

「ザフィーラ？ どうかしたか」

ザフィーラが足を止めて先程フェンリルと戦った場所を見ていた。「いや、誰かがいたと思ったんだが、気のせいだったようだ。先に

行くぞ」

ザフィーラはそう言つと、俺の前を歩いていった。
「なら、いいんだけど」

だが、俺はこの時気付いていなかった……

蛇やっが動き始めている事に……

視点チェンジー

「全く、いきなり飛び出したので追って来てみれば、このザマですか？」

煉達が公園を立ち去った後、煉とフェンリルが戦った場所に黒い帽子を被った男がいた。

「あんまり面倒を掛けないでくれませんかね？」

男は、手を目の前に翳す。

「蘇りなさい、神殺しの魔狼……フェンリル」

すると、男の目の前に何かが形作られていく。

「いいですね。いいですよ」

そして、その何かは動き始めた。

「さあ、完全に蘇りなさい」

動き始めていた何かは、完全に煉が倒したはずのフェンリルになっていた。

「さあ、もう一度『紅蓮の王』と戦ってきなさい」

「グオオオオオオオオオオオオ？？？！！」

フェンリルは、雄叫びを上げるとそのまま公園から消えた。

「まったく、あのケダモノは」

男は、帽子を押さえながらフェンリルが去つた後を見て、嘲笑う。「ふふつ、まあこのくらい相手に、彼が負ける事は無いでしょうが」

男は、踵を返しながら続けた。

「精々、頑張ってください。」
『紅蓮の王』、神宮煉

そして、男もその場所から姿を消した。

帽子の男と復活の魔狼（後書き）

ジンが空気化しそう……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3172x/>

魔法少女リリカルなのは 『蒼』の力を使い『紅蓮の王』になる者

2011年11月25日22時56分発行